

鵜戸神宮の歴史と神話

鵜戸神宮は、古代より神聖視されていた場所に建っています。神殿が鎮座する洞窟などの自然の特徴から、そこが神の住むところだと信じられていたのです。この地が最初に歴史に登場するのは782年のことで、快久という名の僧が神殿を維持するために仏教寺院を建立した年です。江戸時代（1603～1867）には飢肥（現在の宮崎県南部の海岸地方）藩主である大名の伊東家の庇護を受け、神殿の規模が大きくなります。飢肥藩主は神殿を維持する責任を負い、1711年には中心的な聖所（本殿）を新たに建立し、それが現在も使われています。本殿には、梵鐘のような形をした窓や中国やインドの生物を描いた彫像など、仏教の要素が見られます。日本では長い間、神道と仏教の宗教的伝統や装飾様式の融合は自然なものと考えられており、仏教と神道の信仰および慣習は、江戸時代末まで密接に絡み合っていました。

現在は純粋に神道の聖地となっている鵜戸神宮は、伝説上の初代天皇である神武天皇の父として日本の神話で重要な役割を果たしている、ウガヤフキアエズを祭神として祀っています。神話では、狩りの名手である山幸彦と海の神の娘である豊玉姫が子供を授かります。山幸彦は妻のために出産のための小屋を作りますが、彼女は鵜の羽でできた屋根が完成する前に産気づいてしまいます。豊玉姫は小屋に入り、赤ん坊が生まれるまでは彼女の姿を見ないように山幸彦に哀願しました。しかし、山幸彦は誘惑に打ち勝つことができず、海の娘である豊玉姫が巨大な鯨に変身するところを見てしまいます。本当の姿を見られてしまった豊玉姫は、生まれたばかりの赤ん坊を置いて、苦悶しながら海へと帰っていきます。その子供には「ウガヤフキアエズ」、つまり「鵜の羽の屋根の完成が間に合わなかった者」という意味の不幸な名前が付けられました。地元の信仰によれば、出産が行われた場所は、現在鵜戸神宮が建っている洞窟の中だということです。